

電子部品業界の動向 ～スマートフォンからIoTへ～

【ポイント】

1. 円安の恩恵とスマートフォン市場の順調な拡大を受けて、電子部品業界の株価（時価総額）が上昇している。
2. スマートフォンの「小型化」、「薄化」、「軽量化」が進む中、日本製の電子部品の採用が増加している。到来が見込まれる「IoT」市場でも優位性を発揮すると見ている。
3. 特に「IoT」で有望視されているADAS（先進運転支援システム）市場で、センサーやカメラ等の部品の増加が予想される。スマートフォンと合わせて、しばらくは電子部品業界の競争優位が続こう。

2012年11月の衆議院解散後、第2次安倍内閣がデフレ脱却を目標とした無制限の量的緩和策を打ち出したことにより、急激な円安シフトが起こった。

円安シフトは、リーマンショック後、厳しいコスト削減と海外需要を取り込むことで成長を模索していた電機業界各社の業績を一気に改善させ、この結果、株価（時価総額）も大きく上昇した。また、この間で急激に市場が立ち上がったスマートフォンは、特に電子部品業界の業績改善に大きく寄与した。電子部品業界の成長は今後も継続するのかを考えてみたい。

1. 業界内での地位を高めたのは電子部品業界

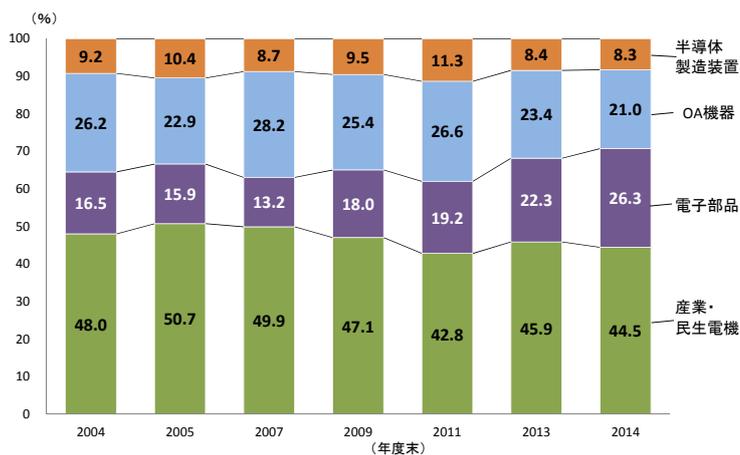
まず、アベノミクスによる株価（時価総額）の変化を見てみる。図表1は2014年度までの過去10年間の電機業界内（主要銘柄）の時価総額の構成比率の推移である。

電子部品業界の構成比は2004年度の約17%からアベノミクス後の2014年度には約26%まで上昇。逆に長年にわたって電機業界を牽引してきた産業・民生電機業界の構成比は約48%から約45%に低下した。

電子部品業界は、大口顧客であった産業・民生電機業界の低迷を受けて海外需要を積極的に取り込んできた経緯

もあり、為替に対する感応度が業界内でも高く、円安シフトによる恩恵が大きかった。また、同時期にスマートフォン市場が急速に立ち上がったことも業績の改善には大きい。スマートフォン市場は、図表2の通り2010年以降から普及が加速している。その中でも、現段階では最も評価の高いスマートフォンの1つと思われる北米大手メーカーのハイエンドスマート

図表1. 電機業界内の時価総額構成比率の推移



(資料) Bloombergより富国生命投資顧問作成

フォンには日本の電子部品業界の製品が多く採用されている。その製品原価の約 50%強を日本製のセンサーやカメラ部品あるいは通信関連部品や機器を繋ぐコネクタなど、高付加価値部品が占めると推定している。北米大手メーカーのスマートフォンは、「小型化」、「薄化」、「軽量化」をキーワードにハイエンド化を進めて付加価値としている。微細で高性能な部品は日本の電子部品業界の得意分野であり、依然として高い競争力を保持しており、北米大手スマートフォンの付加価値は日本製部品の採用が寄与している部分も大きいとも言えよう。今秋発売の新モデルでも更に日本製部品の採用比率が上昇していると予想している。

一方、直近では安価な中国スマートフォンの台頭で汎用部品が増加し、スマートフォンビジネスの収益は悪化すると懸念されていた。しかし、中国スマートフォンにも高付加価値部品の採用が拡大している。日本の電子部品業界の収益機会は当初の予想に反して拡大しており、しばらくスマートフォンのハイエンド化は継続すると見ている。

但し、スマートフォンの台数の伸びは 2014 年に 30%弱の高い伸び率となったが、3 年後には 10%強の伸び率と徐々に市場は成熟化していくと予想しており、今後はスマートフォンのみでは成長は維持できないだろう。次の成長機会が見えてこなければ、早晩、電子部品業界の株価は軟調となる可能性は高いだろう。

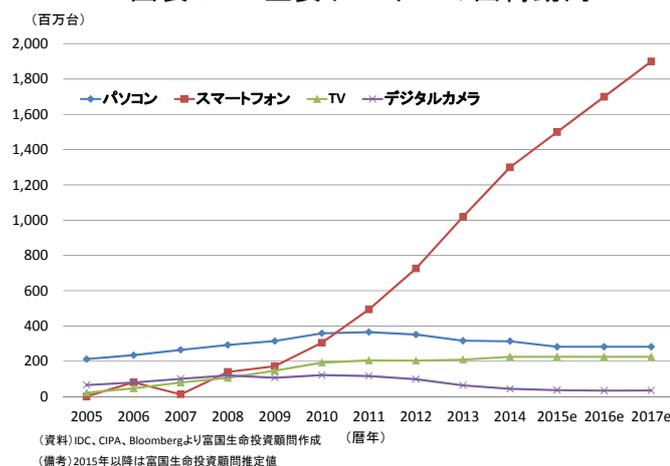
2. 「IoT」時代の到来で、新規の成長ビジネスへ参入

ICT 時代 (Information and Communication Technology の略 コンピューターを中心とした情報技術) は、過去において、メインフレームやサーバー等の企業向けを中心に発展してきた。その後、インターネットインフラの整備や電子部品の「小型化」、「薄化」、「軽量化」が進んだことで個人向けのパソコンやフィーチャーフォン、直近ではスマートフォンが爆発的に普及し、情報端末は汎用化が進んでいる。メインフレームやサーバーでは日本の産業・民生電機業界が中心となり市場を拡大してきたが、個人向けのパソコンやフィーチャーフォン及びスマートフォンが普及してくると海外メーカーが徐々に主導権を確保していった。カスタム化に強い産業・民生電機業界の競争力が失われていく中、「小型化」、「薄化」、「軽量化」技術の優位性から電子部品業界は海外メーカーを顧客として現在まで成長している。

今後は「IoT (Internet of Things)」時代が来るとされている。「IoT」とは、「物のインターネット」と言われており、これまでインターネットに繋がっていなかった家電や自動車など全ての物がインターネットを通じて繋がり、情報交換や互いに制御できるようになることを指している。

「ICT」では半導体、OS 及びソフトウェアが高成長を遂げたが、「IoT」時代が到来すると、図表 3 のイメージ図の通り、入力市場や出力市場のデバイスがセンサーやカメラ、モーターやアクチュエーターにそれぞれ変化することにより、高成長を期待できる新たなマーケットへ変化していくと考えている (円の大きさが市場の大きさのイメージ)。

図表 2. 主要デバイスの出荷動向



現在は「ICT」から「IoT」に変わる過渡期であるが、既に「IoT」の到来に向けて大きな変化が起こっている。例えば、普及の著しいタッチパネルはセンサーで感知して、文字などを入力する仕組みとなっており、スマートフォン、タブレット PC の台頭で一気に市場が拡大した。「IoT」市場の家電や自動車分野でも、キーボードやスイッチ等に代わる新たな入力デバイスが主役となる期待が大きい。前述の通り新たなデバイスの登場で過去の電機業界では主役の変化、つまり活躍する企業や業界群も変化してきたが、今回もそうだろうか？

現段階ではそれに対する回答はノーと考えている。「IoT」では、すべての機器に従来の機能を電子制御化する機能や機構及び通信機能が新たに付加されていくと考えている。「IoT」でも求められるのは、限られたスペースに微細で高性能な部品を搭載する事であろう。現在のハイエンドスマートフォン市場で最先端の技術を提供している企業、つまり日本の電子部品業界が、これまでとは違った新たな顧客にむけて、スマートフォンで培った技術を盛り込んだ製品を提供することで更に成長機会を拡大させていく可能性が高いと考えている。

3. 本命の自動車向けで更なる成長が期待される

「IoT」の到来で、もっとも有望視されているのは自動車の電装化関連の市場である。自動車の電装化と言えば、以前はハイブリッド車や電気自動車などの軽量化や燃費が話題となった。現在、最も注目を集めているのは自動運転であり、2030年頃には搭乗者が全く操作しなくても自動的に運転をするスマートカーの実用化を目指している。この実現には時間がかかるが、その一方で、ADAS（Advanced Driving Assistant Systemの略 先進運転支援システム）と言われる搭乗者の運転を主に電子制御等で補助する仕組みが安全性の面から急速に普及しつつある。既に一部の車両に採用が進んでいて、その機能の有無が車両販売に影響を与えている。テレビCMも流れており、認知度の高いものとして、カメラやセンサーなどで周囲の歩行者等の状況をセンシングし、それをもとに自動的にブレーキで停車する衝突被害軽減ブレーキなどが該当する。

ADAS市場は2020年頃に倍増の1兆円と予想している。現在、自動車のコストのうち30%程度が電子部品で構成されているが、それが50~60%程度に上昇すると考えている。まず当初は「目」の代わりとなり情報を捉えるセンサーやカメラの需要の伸びは特に大きくなると予想している。このセンサーやカメラはICT市場において日本の電子部品の競争力が高く、ADAS市場においても採用の期待が高い。

電子部品業界はスマートフォンの次の成長市場として、既にこのADAS市場に注力している。スマートフォンのハイエンド化の更なる進展及びADAS市場の本格的な立ち上がりへの期待で、しばらくは電子部品業界の競争優位が続くだろう。

(富国生命投資顧問(株) チーフアナリスト 安山 誠健)

図表3. ICTからIoTのシフトで拡大する市場

